

第7回「鉄道の日」記念 フォトコンテスト

受賞作品 および
審査委員長のコメント



●記念フォトコンテストの審査を終えて

審査委員長 十文字義之

10月14日の「鉄道の日」を目途に、基幹輸送としての鉄道が多くの方々に対する認識と理解、更には親しみある鉄道の在り方をPRするため、全国の各運輸局において様々な取り組みを行っています。

国土交通省関東運輸局では、鉄道事業者で構成する「鉄道の日」関東実行委員会を組織し、PRの一環として管内における鉄道を被写体とする、「鉄道の日」記念フォトコンテストを定期的実施しています。本コンテストは、多くの方々が管内でとらえた鉄道をテーマとする写真作品を一般公募し、日夜欠かすことの出来ない鉄道輸送の親しみと認識、理解を高めて頂くことはもとより、写真映像を通して新たな視点と鉄道輸送に対する再認識を得て頂くものです。その暁には、受賞作品の選考発表、表彰、公開するとともに、更なる鉄道に対する原点を見つめる一つの切っ掛けとなることを願っています。

今年は、わが国最初の鉄道開業から150年の記念すべき節目の年になりました。

本コンテストの審査においては、十文字義之(写真家・公益社団法人日本写真家協会会員)を審査委員長に、竹内健蔵(「鉄道の日」関東実行委員会会長・東京女子大学教授)、下田雄一郎(「鉄道の日」関東実行委員会委員長・東急電鉄CS・ES推進部統括部長)、原健人(原鉄道模型博物館副館長)、三村伸弥(テレビ神奈川編成局編成部データマネジメント担当部長)、土屋是広(国土交通省関東運輸局鉄道部長)を審査委員に、9月5日には420点の応募作品の中から事前の予備審査を行うとともに9月7日、本審査を横浜第二合同庁舎会議室において職員立会いの下、公平且つ厳正なる審査を行ったことを先ずはご報告申し上げます。

審査の結果、最優秀賞 1 点、優秀賞 4 点、審査委員賞 6 点、フレート賞 1 点、テッピー賞(中学生以下) 1 点、テッピーナ賞(女性作家)の計 14 点を選考し、以下の通り入賞者を決定致しました。最優秀賞に輝いたのは、小澤宏さんの「農夫と富士と GSE」で、快走するロマンスカー、富士と傘雲、ひまわりと農夫など、見どころが満載の画面構成で、素晴らしい作品でした。その一つひとつの要素が審査委員一同、誰もが引き寄せられるパワーを兼ね備えた力作でした。

今回様々な視点で寄せられた作品群は、420 点(前回 374 点、前々回 448 点)で、応募者数は 149 名と昨年を 4 名減少(前回 153 名、前々回 159 名)したものの、応募者の 1 人当たりの応募数が増加する結果となりました。

一方、「フレート賞」は、暮らしと産業を支える貨物鉄道の力強さを表現し、旅客のそれに負けない表現力を備えています。また今回の「テッピー賞」では、低年齢層の優しい眼差しと、鋭い観察力が垣間見える作品が寄せられ、優秀賞に 10 代の応募者が入賞するなど、新たな変化が見えます。上位入選された作品は、いずれも甲乙付け難いものがあり、小澤さんの作品は審査委員を納得させる作品であったことは、最早言うまでもありません。

全体の作品群を見ると、何処となく作品が委縮している感が見受けられます。そこにはコロナ禍の社会的な行動規制の影響も否めません。

鉄道フォトコンテストという観点では、「輸送」「運ぶ」という概念を決して忘れてはなりません。分野を問わず、輸送を見据えて行く中で、生活に欠かすことの出来ないモードである認識と理解が重要であるということです。今後、撮影活動の中で旅客と貨物のモードに対し、確かな目を養って頂き、持続継続した日々の撮影活動を通じて、自らの作品を創出して欲しいと願います。

●審査総評

応募された作品の総体は、①鉄道のシンボリックな車両そのものに焦点を置いたもの、②輸送機能としての駅空間における相貌、③路線環境(風景)と鉄道との調和、などの作画が大方で占められ、その季節感や時空間が十分表現されている。審査委員たちは、鉄道事業や映像分野に永年携わってきた方々ばかりで、言わばその道のプロである。寄せられた写真群は個々の著作者の想いが込められた自己表現であり、応募された全ての方々に賞を与えてあげたいのは、審査委員共通の思いである。

審査委員は、寄せられた写真群を前に、審査規定をクリアし写真映像として優れた作品である、ということとはもとより、応募者個々が一人の写真作家としてとらえ、著作権者自身が主催者に対してどのようなメッセージを送り、併せて個々の鉄道に対する眼差しや考え方、主催者の意図を十分汲み取り、審査する構えとしている。

応募者の年齢別応募数で見ると、男性は 50 歳代～70 歳代のウエイトが最も高く 56%を占める一方、女性は 50～60 歳代が多くなっている。とりわけ、前回同様シニア層の写真熱が非常に高いものが同える一方、10 歳未満～10 歳代の応募者数の伸びが顕著で、男性では全体の 21%を占める。デジタル化社会において、低年齢層でも誰もが簡単に写真が撮れる時代。若年層は、SNS 等、写真を撮る機会を備えていることから裾野の広がりが見える。写真そのものは撮れても、それがコンテストに耐えられるかどうか、また敷居の高さがネックとなり、応募するまでに至らないという傾向があるのも事実である。鉄道愛好の世代をみると、必ずしもシニア層で占めている訳ではなく、低年齢層から高配まで年齢層を問わないのが鉄道愛好の魅力と特徴なのかも知れない。自らとらえた写真で留まっているものと、作品として創り上げるプロセスや責任がコンテストにおいては二極化していることも確かである。

一方で、当初少なかった低年齢層と女性作家の進出がこの所顕著に見えてきた。蓋を開けてみると、低年齢層は鉄道愛好が高い一方、女性作家はそうではなく、日常の中の被写体として位置付け、最近写真が面白くなってきたとか、鉄道に対する知識がなくとも、被写体の1つとしての選択肢として捉えているのが嬉しい。そこには、車両のフォルムの可愛いらしさ、女性の目線でとらえられている作品に共感が持てた。これまで、男所帯であった鉄道愛好の中で、女性が新たな視点と優しい眼差しで新風を吹き込んでくれていることは喜ばしい限りである。

このような、決して写真や鉄道愛好に対するキャリアではない、作者の感性や眼差し、写真の背景にあるメッセージ性が見え隠れするものがないと、第三者(審査委員)には伝わり難いものがある。また、審査段階では、裏書は最終段階でのチェックでしか確認しない。あえて撮影データを設定しているのに見ない、というのは何故ということであるが、必ずしもそこにはタイトルやコメントが写真と一致していないことが多いからである。タイトルやコメントは示しているものの、写真はそうは言っていない、ということである。作者が現場に立ち、被写体に相対した時、これまでイメージしていた作画や思いに近づけられるのか、が鍵となる。しかし、現実には中々そうはいかないのもので、写真になると見事に覆されることも多い。想像していたものとは別の観点でとらえられる偶然性の面白さや思い通りに行かない難しさ、写真の真の醍醐味なのかも知れない。

●第7回「鉄道の日」記念フォトコンテスト入賞作品

最優秀賞	「農夫と富士と GSE」	小澤 宏
優秀賞	「新緑の中を!!」	市川 洋子
//	「紅に染まる SRC」	伏木田 潔
//	「through the green」	松岡 柁輝
//	「SL の思い出」	岩田 壮一

十文字義之審査委員長賞	「月に見守られて」	地濃 健二郎
竹内健蔵審査委員賞	「Stop」	広瀬 泰雅
下田雄一郎審査委員賞	「煌」	宮川 和典
原健人審査委員賞	「稔りの季節を」	饗庭 正志
三村伸弥審査委員賞	「品川寸景」	横井 規和
土屋是広審査委員賞	「光のシャワー」	田代 宏明

フレート賞	「豪雨に挑む」	野口 茂樹
テッピー賞	「架線柱と京急」	加藤 和樹
テッピーナ賞	「あいさつ」	岡 久子

(敬称略)



最優秀賞 「農夫と富士とGSE」

小澤 宏さん

この場所は、小澤さんにとって何よりの絶好なロケーションであり、撮影を通じて生き生きと活動するメインステージであることが作品から良く分かる。機会ある毎に現地に足を運び、農夫とも顔見知りとなった。そのような同氏の継続した作品作りに対する愛着と同地に対する敬意が作品から感じ取られる。構成する田畑を快走するロマンスカー、青空と傘雲の富士山を背景とする山々、ひまわりと農夫など、いずれも見ると様々な要素を提供し、コントラストの素晴らしさは他の作品を寄せ付けぬパワーを感じた。同氏の地道な撮影活動の結果でもあり、持続継続したテーマに挑む大切を認識する。併せて、代々受け継がれてきた地に小田急小田原線が開通し、農夫が生きてきた環境と時代背景も理解できる。



優秀賞 「新緑の中を！！」

市川 洋子さん

今回、偶然にもテツピーナ賞とともに、女性作家でケーブルカーを被写体とする作品が入選している。山歩きを趣味とする市川さんは、近年は低山を訪れるようになったという。観光利用度の高いケーブルカーの特性も良く理解しているように感じた。高尾山ケーブルカーを捉えた作品は、これまで多くの作品が寄せられているが、ここまで完璧なシンメトリーに表現された作品はなかった。新緑の交換施設に差し掛かる軌条の面白さ、2色に分けられた車体色の双方を上手く構成した。新緑と車体色のコントラストも申し分なく、女性ならではの優しさと綿密な視点に好感が持てた。次回は季節を変えて、同じ現場を撮ってみたら如何か。



優秀賞 「紅に染まるSRC」

伏木田 潔さん

早起きは三文の徳という。以前から伏木田さんは、東海道線の平塚～茅ヶ崎に架かる相模川橋梁の風景を狙っていた。時間の経過とともに刻々と変化する天候の中、良いタイミングでSRCを捉えている。産業と暮らしを支える鉄道輸送の安定性と力強さが十分感じられる作品だ。現場を熟知し、短時間の中で構成できる同氏の綿密な眼差しに拍手を贈りたい。苦勞の暁に必ず良い結果が現れることを信じ、更なる作品作りに励んで欲しい。



優秀賞
「through the greens」

松岡 証輝さん

10歳代の若年層作家が上位入賞することは稀で、松岡さんの作品はベテラン作家の作品を押しつけて入選に至った。その大人じみた作画とタイトルではあるものの、初めてフォトコンテストにエントリーし、入選した同氏の嬉しさと驚きは隠せない。審査委員の一人が「この写真に鉄道は写っているのか」という問いに、当方は「しっかりココにいますよ」と答えたほど、緑に同化し駆け抜ける小海線の顔が見え隠れしている。単一的な緑の中に、自然環境を行く路線環境が表現され、ソフトフォースがかった画像も一層、メルヘンの世界に誘ってくれるように感じた。木陰から一瞬覗かせる車両の見せ方も上手い。



「SLの思い出」

岩田 壮一さん

幼少期の思い出は、大人になっても忘れない。だからこそ、イメージと正しい知識が必要なのだ。公共交通は輸送の観点ともう一つ夢を提供する事業でありたい。対面する乗務員と児童は何を話しているのだろうか。これまで鉄道とリンクしたスナップショットは多くあるも、派手さはないが安心して見られる作品で好感が持てた。大きなSLを操作する力強さに憧れを感じ、彼が大きくなった時、鉄道事業が将来の選択肢として考えられたら幸いである。



十文字義之 審査委員長賞
「月に見守られて」

地濃 健二郎さん

正にタイトル通りの力作である。列車と月をセットに作画できるということは、季節や時間帯などのコンディションを熟知していないと成立しないものだ。それを見事に表現したのは、地濃さんの経験や研究の結果であると同時に、粘り勝ちと認識する。思うように露出が取れない厳しい撮影環境に於いても、LEDの行き先表記がじっくりと腰を据えて被写体に向かう同氏の誠実さが感じられた。



竹内健蔵 審査委員賞
「Stop」

広瀬 泰雅さん

都電荒川線を捉えた作品で、長時間露光により車のライトは残像として流れた。中心には荒川線がポツンと停留場に停まっている。道路右手はヘッドライト、左ではテールライトが軌跡となって流れていく。道路を照り返すコントラストも絶妙で、路線環境を俯瞰した中で、細かなディテールも良く見える。都心の雑踏とは裏腹に、静寂の中に息づく路面電車の優しさが感じられた。



下田雄一郎 審査委員賞
「煌」

宮川 和典さん

朝日を受けて多摩川を渡る小田急ロマンスカー。ちょうど鼻先に朝日が差し掛かり幻想的な光景となった。シルエットと化したボディ、その先頭に位置する乗客に子供の影が見える。そして何処となくサインを送っているようにも見える。大胆なフレーミングも功奏し、定期運用からの引退を控えたロマンスカーを楽しんでいるようだ。ロマンスカーの勇姿は、いつの時代も夢を乗せて、次代に向けた煌めく希望の光を放っていた。



原健人 審査委員賞
「稔りの季節を」

饗庭 正志さん

饗庭さんの作品は、過去にも入選したことあり、確かな作画表現をする作者である。敢えて斜光を狙い、厳しい撮影環境でも彼岸花と田畑のコントラストを上手く表現できている。収穫期を迎える田んぼの情景と、画面からは、青空とともにフル編成のロマンスカーを見事にとらえ、空気感が十分感じられた。



三村伸弥 審査委員賞
「品川寸景」

横井 規和さん

都心の雑踏の中で、普段は人流の激しい通路に写り込む人の群れはいない。コロナ感染症の環境変化の中、公共交通に対するダメージは大きいものがある。しかし、列車は定時に確実に運行され、正方にフレーミングされた絵画の中に同化した赤い電車が写り込んでいる。環境の変化がもたらした相貌なのだが、やはり当たり前前の生活への希望と、当たり前を止めないよう、鉄路への希望を感じ、考えさせられる作品だった。



土屋是広 審査委員賞
「光のシャワー」

田代 宏明さん

洗車機を通るかの如く、森のトンネルを抜けるJR烏山線。斜光を受けて正に光のシャワーを浴びているようだ。その幻想的な風景を見事にとらえた田代さんの優しいまなざしに好感が持てた。住民が沿線に植栽を行ったり、マイルール意識が高い路線でもある。地域と共生する地域路線の飾らない姿に守られている安心感を感じる。



フレート賞 「豪雨に挑む」

野口 茂樹さん

暮らしと産業を支える貨物鉄道の位置付けは、旅客のような派手さはないが、日々の物流を担う重要な基幹輸送である。しかし、陸上輸送に付き物である自然災害の影響はいつの時代も避けられない。降雨の中を水飛沫を上げて快走するコンテナ輸送の力強い姿だった。これほどの厳しい環境でシャッターを切った野口さんの生き込みも評価したい。輸送の安心、安定を願い、環境負荷に優しい輸送モードとして、その位置づけを高めて欲しいと願う。



テッピー賞 「架線柱と京急」

加藤 和樹さん

加藤さんの作品は、テッピー賞の作品の中で群を抜く存在だった。車両よりも電気を供給する施設の部分にスポットを当てた作品で、洗練された作画からアピール性が高い作品である。架線柱の鋼材が織り成す美しさ、背景に赤い電車が向かってくる。同線では今でも古い架線柱が残っており、知ってか知らずか、番記銘板も入れて撮っている視点の高さが伺える。実はこの架線柱は100年経過しているのが認識できる。車両に目が行きがちなの所を取って視点を変えて見据えた加藤君の眼に共感する。



テッピーナ賞 「あいさつ」

岡 久子さん

関東平野に聳える筑波山の相貌は、周囲に遮るものがないので、実際は877mだがひと際高く見える。中腹に位置する筑波山神社のご神体は、この筑波山なのだ。筑波山ケーブルカーの歴史は古く、大正期に開通し、戦時下は軌条供出などもあり運休した時期もあった。交換施設で乗務員があいさつする姿が好感が持て、シャッターを切った岡さん。下りの乗務員は女性で、あいさつの背景には安全を再認識し、互いに労をねぎらう優しい気持ちも感じる。コミュニケーションある職場環境が感じられる作品だった。